

■ 南山大学 人間関係研究センター 公開講演会

僕とオトウトの「かなしみ」について

日時：2023年1月21日（土）15:00～17:00

場所：南山大学D棟地下1階 DB1

講師：高木 佑透 氏

(映画「僕とオトウト」監督)

土屋：

それでは時間がまいりましたので始めていきたいと思います。南山大学人間関係研究センターの公開講演会、本日は高木佑透さんにお越しいただきまして、『僕とオトウトの「かなしみ」について』ということで、2時間ほど過ごしていければと思っております。

全体の流れなんですけれども、最初に簡単に私どものご紹介をさせていただいた後、映画をみんなで観たいと思います。その後に、監督の高木さんとセンター員の池田さんと土屋とで少し、前に出ながら対談形式のお話をしていくという、このようなことを予定しています。そのときには3人だけで話すというわけではなくて、皆さまからも質問や聞きたいこと、感想とかも出していただきながら過ごしていければと考えております。

最初に、人間関係研究センターのセンター長の宇田よりご挨拶があります。お願いします。

宇田センター長：

人間関係研究センター長の宇田でございます。今日は皆さま、この公開講演会にお越しいただいて、誠にありがとうございます。先ほどもお話がありましたように、今日はテレビ局にお勤めで、映画監督の高木佑透さんに来ていただきまして、前半は映画の上映、そして後半はパネルディスカッションということで進めてまいります。

この人間関係研究センターというのは、名前のとおり人間関係に焦点を絞って研究をし、そしてその成果を社会に問うていくことをやってきております。中でもラボラトリー方式の体験学習というものを重視して、人間関係のプロセスというのを追究していくことをやっております。活動としましてはこの公開講演会、それから公開講座、これを多数準備しております。ほか

にコンサルテーションを行ったり紀要を発行したり、あとメルマガを配信したりというようなことをやってきました。

この3年間はコロナのおかげで大変対面での活動が制約されてしまいました、果たして対面を抜きにして人間関係を語れるのかというような、なかなか大きな問いにも迫られておったかなと思います、何とかオンラインで講座を開講してみたりといろいろやってまいりました。しかし、ようやくちょっとコロナもトンネルの先に光が見えてきたのかなということで、この春から期待できるかなと思っております。

今日は高木さんに来ていただいておりますけれども、昨年、この公開講演会にどなたをお呼びしようかなという話になったときに、ちょうど『僕とオトウト』という作品をつくられた高木さんがいいんじゃないかというお話が生まれてお願いをさせていただいたところ、快諾をいただいて今日に至っております。高木さん、本当にありがとうございます、よろしく願いいたします。

それでは土屋さん、バトンタッチいたします。

土屋：

ありがとうございました。

それでは続きまして、本日の講師であり監督である高木さんについて私のほうから簡単に説明した後、映画を観るといふところに入っていきたいと思いません。

今回の高木佑透さんは、香川県高松市のお生まれです。ホームページのプロフィールには「ガキ大将の小学生時代、不登校の中学生、バンド活動に明け暮れた高校生時代を経て同志社大学進学に伴い京都に」と書かれてありました。学部時代に、津久井やまゆり園の事件のニュースを受け、「障害って、障害者ってそもそも何やろう」という問いの答えを探して、映画づくりと研究にいそまれたとのことです。大学院は京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻に進まれ、発達心理学と障害学を学ばれ、今はテレビ局にご勤務と伺っております。修士論文は今回の映画に関するテーマで書かれたようで、その内容は今後出版される予定もあるということです、そちらもぜひ皆さま、手に取っていただければと思います。

続いて映画づくりに関してです。映画づくりは神戸・元町映画館を拠点とする映像制作集団「元町プロダクション」にて行っており、映画監督の池谷薫さんの指導を受けられたとのことです。厳しくも愛のある池谷さんの指導のおかげで何とか映画をつくり終えられたということでした。映画に関する監督メッセージというところから一部を紹介しますと、家族として接してきた今までの「弟」ではない、監督の知らない「オトウト」を知りたいという思いを映画のタイトルに込められたということでした。先ほどお話ししましたとおり、後半は実際にお話もいただきながら過ごせるということで、こちらも楽しみにしております。

事務的な連絡ですが、今日の録音などに関する事です。映画については撮影・録音はご遠慮いただければと思います。また、今回の後半の対談部分にしましては、テープ起こしをしまして人間関係研究センターの紀要に掲載予定でおります。そのためにセンター員は録音をしておりますが、それ以外の方はご遠慮くださいますようお願いいたします。写真はオーケーというふうになっております。よろしいでしょうか。

それでは早速映画の上映の準備をしていきたいと思います。いましばらくお待ちください。この空間をちょっと暗くして見やすいようにしていきたいと思います。

(映画上映)

土屋：

では準備ができましたので、後半の対談のところに入っていきたいと思えます。今回の監督・講師であります高木さんです。どうぞお願いいたします。

高木：

本日は観ていただきありがとうございます。監督の高木佑透です。本日はありがとうございます。南山大学さんのこのすごく立派なホールで上映していただいております。

最初に僕のほうからちょっとお話しさせていただいた後に、池田先生と土屋先生と一緒にお話を進めていければなと思っております。

この映画、改めてなんですけど、2019年度の1年間、コロナ前の年ですね、1年間を使って撮影と編集をしていて、2020年度もちょっと配給宣伝といえますか、例えばチラシをつくってくれるデザイナーの方を探したりとか、あと今回の映画の僕とオトウト上映委員会という上映委員会を立ち上げて学生主体で、僕も当時大学院生だったんですけど、上映までやっていました。そして、劇場公開が実現したのがちょうど1年ちょっと前ですかね、2021年の秋でした。なので、制作してから3年ぐらいは経ちました。今でも自主上映の話がたくさん、北は北海道、南は九州までいただいているんですけど、僕は最近髪型がだいぶ変わりましたので、「今話している方は監督の高木さんでよろしかったでしょうか」と質問されることがあるんですけど、ちゃんと高木本人です。これは全然関係ないんですけど、僕はずっと縮毛矯正、ストレートパーマを当ててまして、こっちが自毛なんです。そういうつかみで入らせていただきます。

「上映会、プラス、トーク」というシンプルな形でやらせてもらうこともたくさんあるんですけど、今回「タイトルもいただければ」というお話だったので、『僕とオトウトの「かなしみ」について』というタイトルにさせていただきました。

かなしみという結構皆さんぱっと思い付くのって、やはり何か事故に遭っ

て、例えば「悲しい」とか、そういう悲哀の「悲」のかなしみがたぶん多いと思います。僕が映画をつくり終えた後に修士論文を書いていて、これからそれが本になるんですけど、それをまとめているときに、若松英輔さんという詩人の方がいらっしゃって、NHKの「100分de名著」という番組で、石牟礼道子さんの『苦海浄土』とか神谷美恵子さんの本とかを紹介している方なんですけど、その方の本か何かで、かなしみという言葉はもともとすごくいろいろな多義的な言葉だったんだみたいなことが書いてあって、それを読んでいくとさっき僕も言った、いわゆる悲しいというか、誰か大切な人が亡くなってしまって悲しいというすごくストレートなかなしみもあれば、愛情の「愛」に「しみ」でもかなしみと読むらしいですね。これは今でもiPhoneとかで打ったら変換で出てくるんですけど、そういうかなしみもあり、あと哀しみのかなしみもありますよね。それもかなしみですし、あと「美しさ」に「しみ」でもかなしみと読むらしいです。何せ日本のもともとの言葉として「かなしみ」って、すごく情感あふれる言葉だったんだということが書かれていて、それを自分自身のきょうだいとしての体験というか、それに置き換えて考えてみたときに、やはり割り切れない言葉ばかりなんですよね。もちろん、例えば弟が冒頭ボタンを押しちゃうとか、トースターに何か詰め込んで燃やしちゃうとかいろいろありましたけど、もちろんそれは、それをやってしまうこと自体はまず悲しいですよ。わあー、家が燃えちゃった、悲しいという、そこはすごくシンプルに悲しい。でも、よくよくそれが終わって見た後に考えると、今回の僕の言葉だと、出演者としての高木佑透の言葉だと「せつない」という言葉になっていますけど、うちの弟はこちらの言うことはこんなに、9割型理解しているのに何でやっちゃうんだらうって、悪いって分かっているのに何でこんなにやっちゃうんだらうということを見ると、やはりちょっと哀れみみたいな気持ちもどうしても芽生えちゃったりとか。でも、そういう弟のことがやはりかわいいんですよ。夕方のシーンに、僕がうたた寝しているときに弟が抱きしめてくれる、すごく大事なシーンがありますけど、当時僕は22歳で弟が17歳なので、普通あの年齢になって男同士のきょうだいが、しかも日本ですよ、ハグして愛情を確かめ合うなんていうのはなかなかないと思うんですけど、でもいまだにやはり弟はああいふ形で、すごく真っすぐに愛情を伝えてくれるんですよ。僕もそういう弟のことが、どんなに悪いことをしてもやはりなんかかわいいなと思うし、好きだなと思うし、そこにやはり愛情もかなしみもあって。

そこからもう一段考えていくと、弟のあの愛情手段って、ものすごく嫌なお医者さんの言い方をすると、弟はやはり最重度の知的障害があるので、発達年齢が例えば何歳児程度しかなくて、だから普通の18歳の男性だったら恥ずかしいと思う、抱きしめるとかキスをするとか、そういう手段できょうだいに対しても愛情を伝えているんだみたいな、すごく冷たい言い方もできると思うんです。でも、よくよく考えてみると、やはり僕たちって本当はそれぐらい愛情を

伝えたい相手とかたぶんいるはずなんですけど、でもやはり育っていく中で恥ずかしいなとか、あとこんなみともないからするもんじゃないとか、そういうことをだんだん思うようになって、やはりそういうことができなくなっちゃうと思うんですね。そういうことを考えていくと、やはりさっき言った美しさのかなしみみたいなものも弟が伝えてくれているんじゃないかとか、そんなようなことを思ったりもしています。そういういろいろなかなしみがぐるぐるあって、僕と弟は家族なので、これから先もお互いが、どちらかが死んでも弟のことは僕の中にやはりずっといて、いろいろな割り切れないかなしみがぐるぐるといろいろな時々で出てきているんじゃないかみたいなことを、今度は言葉で考えていったんですね。

今回話したこの「かなしみ」という言葉はものすごく幅が広い言葉なので、タイトルにして議論が深まったらいいなと思ひまして、今回のタイトルにしました。なので、ここからお2人、土屋先生と池田先生にご感想なども伺いながら、ここから進めていきたいと思ひます。お願いします。

土屋：

ありがとうございます。それでは、池田さんからお願いします。自己紹介からいきましようか。

池田：

南山大学人間関係研究センター研究員をしております池田と申します。こちらの時間から失礼いたします。よろしくをお願いします。

土屋：

私も自己紹介がちゃんとできておりませんが、このセンター員をしております土屋耕治といいます。どうぞよろしくお願ひいたします。

では、感想をお伝えするところからということですが、いかがですか。

池田：

本当に率直に申し上げますが、私は途中でこの部屋を出ていきたいなと思ったところがあります。この映画で高木さんという方がいて、ぜひお招きしたいと言ひ出した人は残念ながら今日、予定があつて来られないということなんですけど、私もそれ以前からチェックをしていてすごく気になっていたものだったんですけど、でありつつ、途中から本当に観ていることがとてもきつくなつてきました。

高木さんと同じで、私も知的な障害を持つ兄がいて、弟と兄の違いはありますし、また障害の程度も違いますし、数年前に脳卒中になつて身体障害も加つたらもうどうにもならなくなつたという、そういうオチはあるんですけど、隠したりしたくない。最初のほうに出ている言葉から、ずっと自分のここまでの生きてきたところをなぞられているというか。しかもあまり、あることは知っているけど直視をあえてしたいと思わない、隠すわけではないし、目を背けるわけではないが、そういうのもありつつ、こちらもちちらで日々の人生があり

日々の生活がありとして生きているものを、本当にそのものをどんどん突き付けられ突き詰められ。あのお父さまに怒りをぶつけていたシーンなんかも、本当に自分自身の過去を、形こそ違えど全て同じことであつたもので。たぶんここに上るといふ役割が与えられていなければ、途中でもう無理だと自分で思ったところもあつたかなというのが率直なところですよ。

であるがゆえに、本当にこれは感想ですけど、ここまでつくり上げられ、そして恐らく上映するたびに、言ったら壇の上に上らせられ話をさせられるということが続けられるそのエネルギーというのか、その原動力ということが、本当に言葉にはできないぐらいの、尊敬とかそういうものではなくて、本当にシンプルにすごいことだなと思ひ、またそういうことをする原動力みたいなものが、自分にはない原動力がどこにあるのかということを考えながら拝見しておりました。

高木：

はい、池田先生、ありがとうございます。本当にたまたまだつたんですけど、先ほど上の打ち合わせの部屋でちょっとお話しして、池田先生と本当の初対面なんですけど、実は私もきょうだいなんですという話をしてくださって、これはそうですかという、すごくありがたかったです。

僕も、劇場公開中も大体1カ月ぐらひやつていたんですけど、毎日とにかく登壇して、毎日いろいろなゲストの方を呼んで対話するという。この映画を一言で、一語で何の映画かといつたら、コミュニケーションの映画なんですよ。なので、答えを出す出さないにかかわらず対話をし続けるという映画なので、トークも合わせて本当にこの映画の中身だと思ひもあり。なので、自主上映という、こういう形に移つても、トークの機会をいただける場合は日本中どこでも飛んでいきますということで、おしゃべりさせていただきます。

池田先生がしてくださつた話はすごく大事な話なので、そもそもきょうだいってどういう人たちかみたいなのをちょっとしたいと思ひます。

今回の映画で、なんかバンダナで頭を巻いているめっちゃ怖いおじさんが出てきたんですが、あれがうちのプロデューサーの池谷薫さんという方です。映画監督としてすごく有名な、ドキュメンタリー映画監督としては本当に日本指折りの方で、「蟻の兵隊」という中国の山西省に取り残された老兵の方を追つたドキュメンタリーとか、あと東日本の震災で家と息子さんを失つた木こりのおじさんの話を撮つた「先祖になる」という映画とか、世界的な賞もたくさん取られてる方です。その人が10年ぐらひ前に立教大学で教えていたんですよ。そのときに卒業制作として指導した映画で「ちづる」という映画があります。その「ちづる」という映画も本当にきょうだいの映画で、赤崎正和さんというお兄ちゃんがついて、妹さんがちづるさんという、自閉症と知的障害のある妹さんがいて、そのお兄さんが妹さんに向き合うという映画なんですよ。これは紀伊國屋書店からDVD化もしていますし、自主上映も続いているので、ご興味

あればぜひ観てみてください。その赤崎さんともよく連絡を取っていて仲良いんですけど、赤崎さんは僕とは全然違うタイプのきょうだいで、妹さんのことは好きだけど、小学校以来誰にも言えなかった方なんです。僕るときはいわゆる「ガイジ」だったんですけど、僕より幾つか上の赤崎さんのころは「シンショウ」だったらしくて、心障者か身体障害者か分かりませんが、そういうスラングが学校で流行っていて、小学校3～4年ぐらいのときに赤崎さんはやはりそれですごく傷付いて、そこから妹さんのことを人に言うのが怖くなって、中・高・大と誰にも言えなかったらしいんですね。ただ大学に入った後に池谷さんのゼミに入り、池谷さんのゼミに入るということはドキュメンタリー映画を卒業制作でつくるので、「赤崎、何撮りたいんだ」みたいな話をしている中で、本当にある日突然赤崎さんが、実は妹に障害があつて、でも誰にも言えなくてという話をぶわーっと話されたらしくて。僕は西日本出身でこうべらべらしゃべるタイプですけど、赤崎さんは本当に朴訥とした方で、すごく言葉を一つひとつ確かめながら話すような話し方の方なんですけど、そういう物静かな方が、本当にぶわあーって泣きながらうわーってしゃべられたらしいんですね。池谷さんは池谷さんでそれをひとしきり聞いた後に「じゃあおまえ、撮ればいいじゃねえかよ」という話で始まったのが「ちづる」という映画なんですね。すごく「ちづる」も素晴らしい映画で、(正和さんの)お父さんが事故でちょっと早くに亡くなっていたりもするので、基本出演者はお母さんと赤崎さん本人とちづるさんの3人だけなんですけど、すごくいい家族の映画になっています。ただ、本当に赤崎さんの場合は、妹さんのことを誰にも言えなかった、言えなかったからこそ映画にして伝えたいんだ、言葉にならないからこそ映画にして伝えるんだという、そこが本当にストレートにつながっている映画で。僕とは全然違うきょうだいですよという話が1つですね。

その後もこういう形でトークとかをさせていただくこともいろいろあるんですけど、一番やはり同じ当事者の方に観ていただいたときに、僕も思いもよらない感想とかをいただくことがすごく多くて。人によっては「ふーん」という感じで観て「ふーん」という感じで帰られる方もいるんですね。「どうでした?」と聞いても、「いや、なんかすごい日常的に見てきた風景でいつもの感じでした」と。「そうですね」みたいなときもあれば、そういう場合じゃなくて、相模原の事件の翌年に「亜由未が教えてくれたこと」という、NHKスペシャルでNHKの若手のディレクターさんが、亜由未さんという障害を持っている妹さんと向き合い直すみたいなのがあつて、それも今、NHKアーカイブスか何かでたぶん見られるんですけど、この「亜由未が教えてくれたこと」の方(ディレクターさん)にも以前観ていただいたことがあるんですけど、その人とはめちゃくちゃ議論になって。だから僕自身は弟に対して対等に向き合いたいという、対等に向き合うそのアプローチをいろいろして、一番最後に僕自身が僕自身の言葉で弟に本気でしゃべったことがなかったというところに一応たどり着

くまでの映画なんですけど、あそこがその「亜由未が教えてくれたこと」のお兄ちゃんは全然納得がいかなかったらしくて。「あそこで高木さんは周りがみんな『ガイジ』とか言っていたっていう話を弟の壮真さんにされていますけど、ああいう話をするのはやはりひどいんじゃないでしょうか」とか、そういうことを言っていて。どれが絶対の答えというのはないんですけど、でもやはりその一つひとつに対してすごく強い思いとか、あるいは逆に全然何も思わないとか、そこの振幅はきょうだからこそすごくあるのかなとは思いますが。

どういう思いでトークをしているかという話も後ほどできればなと思います。先にちょっと土屋先生からも感想をいただければと思います。

土屋：

ありがとうございます。何をどんなふうに伝えながらいるかなということを考えていました。予定では映画を観た後、すぐにトークかなみたいな感じで考えていたんですけど、余韻とかの時間がほしいなと思いながら過ごしていたところです。まだ、いろいろ落としこみながら過ごす時間もほしいな、それだけすごく魅力的ないい作品だったなと思いながらおります。2つほど思ったところ、また後でいろいろ足していくかもしれませんけれども、お話ししようと思います。

1つは、作品にすることでそのテーマを扱えるようにしていくということがクリエイティブにはあるんだろうなということです。宇多田ヒカルも、お母さんとの関係や亡くなったことに関して、曲にしていくことによって自分はそれを扱っていったんだということを話されていたことがあったりだとか、研究者とかでも論文を書くとかテーマとして扱うということは、それをどういうふうに自分の中で受け止めていくかということをもさにやっていると思ったりしているんですね。そういった中で、まさに弟さんとの関係だったり、家族に関することをどんなふうに今捉えていくのかとか、それに対してどう向き合うかということ、この作品をつくることを通してされたんだろうなと思いました。しかも、その後もありますよね。上映後の対談を通して、どのようにほかの人が受け取るんだろうか、その中で新たに自分の中に生まれてくるものは何だろうかということも、こうした場に来てくださって、開いてくださっているんだなと思いました。

2つ目の感想は、どう表現したらいいのか難しいんですけども、途中この映画は何だろうかと思っていたときに、「結婚する」というのがテーマなのかなと思いました。佑透さんと壮真さんの間の結婚ということなんですけど、いちゃつくシーンとか食事に飛び出して手をつないで歩いているシーンなども、本当にデートだなというふうに見えたんですよ。なんかそれが、許嫁としてあった、一緒になっていくんだということが決まっていた二人がいて、そして、ちょっと別に過ごしていたときがあったけれど、実際に本当に一緒になっていくかというときに、どんなふうに相手と向き合うんだろうかということも扱っ

ている、そんなことを思ったんですね。養護学校を卒業していくという大きな段階であったりとか、佑透さん自身も、監督自身も学生生活を終えて社会に出ていくというような区切りであり、お父さま・お母さまも高齢になられるなかで、どんなふうに自分が弟さんと関わっていくんだろうか。それはある種決められていた一緒になっていくんだということであり、そしてそこを実際にどう関係を紡いでいくのかということ、途中いちゃいちゃするシーンとかちょっと初々しいシーンとかというようなことが挟まれながらやっていくという、そんなことをちょっと途中で感じていました。行動としても、監督からの主観的視点だったりご自身を撮ったり、またその中でのお母さんの立ち位置を紹介したりということもあったりするんですけども、そんなことを感想として思っているところでした。

高木：

はい、ありがとうございます。そうですね、1つ目、作品にすることでという話は本当にそうだと思います。僕も宇多田ヒカルはすごく好きなんですけど、それはおいといて。

そうですね、今回本当に作品にしないと気づけない、そして人に伝えられない、自分の中にも言葉にならないことばかりだったなというのは、本当にそう思います。いっぱいあるんですけど、まず1つ目だと、この映画は本当に基本兄が弟のことを知ろうとするという映画の流れはずっとそうなんですけど、前半僕がやたら笑っているんですね。真ん中辺りから味付けがだんだん変わってくるのが何となく分かると思うんですけど、最初映画をつくろうと思ったときは、さっき話したように「ちづる」という映画がやはり頭の中にあっただので、「ちづる」の赤崎さんご兄妹とは違う、何というか障害をそんなに気にしていないきょうだいもある種いるんだよみたいな、楽しい笑顔いっぱいみたいなという感じでちょっと考えているんですよ。実際それはうそでは全くないので。なので、その普段の感じで撮ると、やたら笑っているんですよ、僕自身が。そして撮っていくんですけど、撮っても撮っても毎回持って帰ってはプロデューサーの池谷さんに「これじゃあおまえ、ホームムービーだ、映画になんねえ」みたいな、めちゃめちゃずっと12時間くらい怒られ続けて帰って編集してと言う、地獄みたいな生活が続いたんですけど。でも何と云うか、それぐらい自分自身を含む家族という場所を撮ってはその映像を見て編集して、いろいろまた気付いたり編集を組み直したりしてまた撮ってというのをずっと繰り返していくと、スクリーン上の自分というものをだんだん客観的に突き放して見られるようになってくるんですよ。そうなってくると、この出演者の中の高木佑透という人は何でこんなに笑っているんだろう、そんなに面白いかなこれ、よくよく見ると。みたいなふうに、だんだん突き放して考えられるようになってくる。確かに笑いというのはやはりすごくパワーを持っていますよね。少々つらいことがあっても、やはりその笑いでもう1回生きていこうと思えたりとかと

いうのはすごくたくさんあると思うんですけど、でもそこもやはり考えようで。弟がある種、どんな変なことをしても笑いで許すとか流すということをやったりこれだけ繰り返してきていると、弟が何か伝えようとした表現みたいなものをすごく今まで見落としてきたんじゃないかなみたいな、何かいろいろな表現A、B、C、Dってあるのを全部ならすように、笑いでこう「はい、おはよう、面白いことやってますね」というので、見えないように自分自身がしてきたんじゃないかなと気付いたりもしている。そういう気がたくさん、たくさん芽生えてきた先に、さっき話した映画の中でも言っている、僕自身が僕自身のことを弟に、伝わるか伝わらないかは分からないけど言っていなかったという気付きにつながっていくんです。なので、これも作品を撮っていないと分からなかったことのまず1つかなと思います。

あとほかにおやじ、父親に関しても作品を撮らないと分からなかったこと、向き合えなかったことがたくさんあるんですけど、ちょっとそれも後でお話できればかなと思います。

もう1個提示してくださっていたのが、何でしたっけ、いいなずけというのか。そうですね、ちょっとずれるかもしれないんですけど、本当にさっき言ったように、いまだにべたべたしているんですよ。この正月もめっちゃ久しぶりに帰ったんですけど、相変わらず抱き付かれて「はいはい」って感じだったんですけど。なので、弟は言葉がやはり、こちらが言うことは相当理解しているんですけど、自分で話したり書いたりするのがかなりきついですね。自分で話すのも、今回はいっぱいしゃべっていますが、本人オリジナルの「手言葉」で話すんですね。あれも本当に本人オリジナルで、例えば何かこう、僕、僕分かりますよね。何かこう、口でしゃべりながらですけど。だから僕とか歩くというのは直感で分かるんですけど、こういうやつだと分からないですよ。分からないので、最初いろいろ聞くんですよ。壮真がなんかよう分からへんけど、どこか行って歩くみたいなの。「これそもそも何?」、「花? チューリップ?」みたいな。いろいろ確認していったら、全部、違う、違うと言うんですね。本人も伝わらなかつたらだんだんいらいらしてきて、(僕の)肩をばんばん、ばんばんたたいて、「ちゃんとこっちに顔向けて聞きいや」っていう感じでしゃべられるんですけど。そういう感じで、「それって何々?」というのをしばらく繰り返していくと、いろいろな文脈で弟もしゃべるので、手言葉と言葉の意味がだんだん一致してくるんですね。通っていたデイサービスがエリスというところなんですけど、「壮真、昨日そういえばエリスへ行って散歩してたな」みたいな。「ああ、エリスのこと? それ」と言ったら「うん」って満足そうにうなずいて黙ってくれるんです。という形で、家の中で手言葉がまた一つ生まれて、家族の中ではそれが共通語になる。そういう手言葉でたくさんしゃべってはくれるんですけど、でもやはり、すごく自由に日本語という言語で話をするのは結構難しく。ただあれだけ小さいときから触れ合ってコミュニ

ケーションを取っていると、理屈じゃないんですけど、何かコミュニケーションを取っているんですね。例えば弟がすごくハイなとき、すごくピョンピョン、ピョンピョン飛び跳ねるんですけど、何か怒ったとき、何か好きなものをあげたりとかiPadを預けるとかじゃなくて、とりあえず後ろから抱きしめて手を握ってあげたら、すごく静かになったりするんですね。そうすると、本当に弟の汗ばんでいて高い体温だった手がだんだん、だんだん下がってクールダウンしていくのが分かったりとか、ものすごく本当にダンスしているような感覚で、体と体でコミュニケーションを取っていて。なかなか言葉にならないんですけどそういうコミュニケーションをしているんだというのが伝えたくて、ある種映像という手段を使ったりとか、論文にしていく過程でも、何かその身体感覚でどんなふうなものが流れているのかというものを見つめたり考えたりというのはしたりしていましたね。

というところで1回ちょっとまた、どうでしょうか。戻しましょうか。

池田：

私は土屋さんとはまたちょっと違う。土さんの、そういう見え方もあるんだと思って面白くて。私はそれを聞きながら思ってここにメモをしたのが、あの映画の主演は実はお母さまじゃないかというところがあって。孫悟空がお釈迦様の手のひらの上で踊らされているじゃないですけど、あのお母さまの手のひらの上でお父さんも壮真も、そして出演していた佑透も全員踊らされているというか。私本当にいろいろ考えていて、とにかく書いているのが、「そんなことをやるのに何の意味があるの」というようなメモをいっぱいしているんですね。いろいろ見られていて、たぶん途中でいろいろご自身でお気づきになられたりとか、プロデューサーの方に言われてというところもあると思うし。私は正直、ラストの語っているところも、私の見方として、これはいったい何の意味があるんだろうか、誰にとっての何の意味というか良いことなのかと思えて、そこはどうしてもまだ落ちていないんですけど。途中でいろいろ鍵を全部開けられるところなんかもそうですし、あとお母様が語っているときって結構な割合でキッチンで何かをしながら。自分の母親のことも思い出したんですけど、あんなすてきなキッチンではない、昔ながらのぼろい家だったんですけども、でもとにかくキッチンで手を動かさないと私もいるし、食事をつくらなきゃいけない、洗い物もしなきゃいけない、でもその意識のうちの6割はお兄ちゃんのほうを向いている。でもそれをしながら残りの4割で完ぺきに母親ということ、完ぺきな母親というのは母親としての完ぺきさではなくて少なくとも母親として成立することをやっているところなんかを思い出しながら。それでいて開けるところも、何か開けて渡しているところも、しれっとやはり何かしながら感想をおっしゃるんですね。だからあそこで本当にお母さまがいろいろなことを、たぶん言葉にならない何かを感じたり、誰よりも、それはたぶん父親といえどきょうだいといえどかなわないものってこういうことなの

かなというものを思い起こしながら。私は、あれはもう何か子どもが2人手のひらの上で転がされているシーンに見えたななんていうふうに思っていました。

高木：

ありがとうございます。そうですね、意味というところから先にちょっとお話すると、若干ちょっと理屈っぽい話が続きますが、障害というものを考えるうえでよく言われるのが医学モデルというものと社会モデルというものなんですね。ご存じの方もいるかもしれないですけど、いわゆる今の日本で「障害があります」というと医学的な感じがしますよね。要するに個人の、例えば目が悪いとか耳が悪いとか、知的障害だとIQ、脳が悪いとか、体のどこかしらが悪いという障害の原因が自分にあるというのに加えて、その責任を誰が負っているかというところ、この映画はあえてそういう描き方になっているというのがありますけど、結局家族が見たりとか本人の自助努力で何とかしていただきたいな。あるいは医学的にその個人に対して治療をして治してくださいというのが障害の個人モデルとか医学モデルというものなんですね、すごくざっくり話していますけど。それに対して、ここ最近ようやく一般的になってきたのが障害の社会モデルという考え方で、よくある例だと、足が悪くて車椅子に乗っている方が階段のあるお店に行ったら上がれないですよ。上がれないんですけど、そこにエレベーターをつけてもらって2階にそのまま行けるようにしたら、足に障害がある人もない人も2階のお店に食べに行けますよね。なので、障害は個人じゃなくて社会にあるんだという。だからその障害の原因は社会にあるし、その原因が社会にある障害というものを、その責任も社会が負って良くしていこうよという考え方が障害の社会モデルなんですね。なので、自然と障害の研究とかもやはり医学系の方とか社会学系とかの方、社会福祉とかいろいろありますけど、そういう方のほうが多いんですけど。さっき話していたような話とか、僕がこの映画にしているようなきょうだいにとってこんなかなしみがあるんですという話とかは、全然その医学モデルとか社会モデルの話をしていてもあんまり変わらないんですよ。いや、あるものはあるので、という。だから僕自身がずっと障害に対して思っているのは、本当に自分の体に障害がある方だけじゃなくて、その周りの人たちにとって障害を語る言葉とか思いとか概念とかが本当に全然ないんじゃないかなというのが、僕自身のテーマなんですね。

そういう観点でさっきの意味みたいなものを考えると、この映画を本当につくったところで、当たり前ですけど弟の知的障害は治らないんですよ。治らないですし、これをつくったことですぐ社会が良くなるかということそうでもないんですよ、別にそんな社会を告発するような映画にもなっていないです。ただ僕自身も本当にもう、主語私だけですけど、僕自身のテーマとしてこれだけ弟と向き合った結果として、弟が自分の言葉で語りだしてくれて。それを受

け取った僕自身が、今まではやはり弟の将来のこととか見ないかんのかなとか、親は全然見んでいいと言っているけど、そんなのは親が言ってるだけで、僕自身がどう思うかは全然別の話で。いろいろ気にしていたけど、やはり弟自身が弟自身の言葉で、あの文脈で兄ちゃんと住むとか家族と住むって一切言わずに、あのにこにこした朗らかな感じで家以外の場所ばかりを言ったというのは、やはり僕個人にとってはすごく大きいことなんですよね。すごくだから何と言うか、軽やかに僕に許しを与えてくれたような気がするという。だから意味というとなんかそれだけです、僕自身が救われたという。救われる、完全に救われてはいませんが、救われる部分があったという、ただそれだけなんです。

ただ何と言うんですかね、医療的にこうすればOKとか社会からこんな補助があればOKなんて、そんな甘っちょろいもんじゃないぞって。家族として生きていくにはやはりいろいろな面倒くさいことだらけなので。なのでこの映画を見てもらったきょうだいは本当にいろいろな感想いっぱいあるんですけど、やはりすごく大学生ぐらいの方に見てもらったときに、映画を見た後にいろいろ話していて、すごくこういうことをしゃべってもいいんだと思えたとか、これでちょっと気が楽になったとか、あるいは親とちょっと話してみようと思ったとか、そういうことを言うてくださることは結構あって。だから意味というとなんかそういう意味になるのかな。僕自身の救いのために作った映画が僕以外の人のためにもなっていると願っている。そんなところにもあるんですね。

家族全員の話をちょっとしっかりとしようと思うんですけど、一番面白いおやじより先に母の話をしてしまおうか。そうですね、母親はこの映画で出てくる中で一番何というか、ある種悪いところが出てこないんですね。それはでも実際嘘なくあいう母親で。僕自身も中学校のとき、いじめとかが理由ではなかったんですけど1年半ぐらい学校に行っていない時期があって、父親もそのころ仕事が相当きつくてかなりうつ病が酷かった時期もあったんですね。家でわあわあ言っていた時期とかもあって、あと祖母の介護とかもいろいろあったんですけど、そういうのをいろいろ乗り越えてきた上でのあの人なので。それはもちろんパワフルなのはパワフルです、本当に良いお母さんですねというご意見を帰りにいただくことも多いんですけど。ただ面白いし大事な話ですけど、この映画がDVD化とかディスク化しないのは、母親とのいろいろやり取りの中でそうなっているんですね。この映画は完成した後に全国で見ていただいていますけど、本が出るときに一緒にディスクにして出そうという話もあったりしたんですね。そういう話を母親にしていたときに、いろいろ何時間も話したんですけど、母親いわく「とにかく嫌なもんは嫌なんよ」というのがまずあって。それも中身もいっぱいあるんですけど、まず皆さん映画を見てみると大体人の顔とか見ているんであんまり気付かないんですけど、よくよく部屋の隅とかを見るとダンボールが積みあがっていたりとか、家を守る母親としては見られたくないものがいっぱいあって。母親にもいつも言われているんですけど、

「あんたよう分かってると思うけど、私そもそも自分の家の中の話とか家の中撮るなんてそんなとんでもないって人やからね、あんたが撮るんやから協力したんやからね」って話をずっと言われていて。根本的にそういう人なんです、どちらかというところ、恥ずかしがりやなんです。だからそういう嫌なものは嫌というのがありますし。

あと、弟が例えばちんちんいじっている（のかなと分かる）シーンとかもありますよね。あそこのシーンの意味みたいなものをちょっと丁寧に話すと、弟は実際にああいうことをやっているんですけど、あのカットだけで終わっていないんですね。ちゃんと母親のほうに行って、母親にああいうことしてたんやけどさって母親に聞くと、ちょっとふふって笑って。「最初はもちろんちょっとびっくりしたけど、別にある種生理現象やし、別にやって何が悪いっちゃうことやし、だから家の中では布団かけてやったらいいかということにしたんよ」って。ちゃんと受け止める母親のカットがあるから、まず映画に（そのシーンを）入れ込めていますし。それも母親が言っていることをそのまま借りますけど、やはり障害のある人の性とかって本当にタブー視すごくされがちなんです。だからある種弟もすごくかわいいキャラクターですし、すごく天真らんまんかわいい人というだけで終わっちゃうんですけど、別にそれはそれ、これはこれで、弟ももちろん男なので男女関係なく普通に性欲はもちろんありますし、別に何が悪いねんという。という、あのシーンの持つ意味みたいなところは母親本人が誰よりも理解していて、「そこはぜひ映画に入れたらいいんじゃない」ということで映画に入っているんですけど。それがディスクになって不特定多数の人のところに渡って、どこの誰か分からない人にいつ見られているかも分からないという状況は、一観客としてはすごくぜひ映画にしたらいいと思うけど、最後の最後に壮真の母親として考えたときにやはりそれは出せないという判断になったんだということを言っていて。だからそういう嫌なものは嫌というのもあるんですね。母親も弟の知的障害がやはりどうしても重いので、代理人として結局サインをずっと今まで書き続けてきたという話をするんですね。それは仕方がないんですけど。だから今回の映画出る・出ないとか、出す・出さない。どこまで出す・出さないとかも、全部今まで弟の代わりに、壮真の代わりに代理人として自分がサインしてきたことの延長線上なんだって。良くも悪くもそれ以下でも以上でもないという言い方をしている。なのでそういう立場で考えたときに、今回は上映は続けてもらったらいいいけど、基本対面の上映会でということになったんです。

なのでそこで池田先生の最初のお話にもちょっと戻りますけれども、もちろんこの映画を見てもらうことで、そしてトークを聞いてもらうことで、僕も今伝えたいことがたくさんありますし、あと上映委員会はほとんどみなさんがボランティアで、超低額でこの映画は劇場公開までこぎつけたのでそういういろいろとか、家族がみんな出てくれたこととかいろいろなことを伝えたいし、今

まで支えてくれた人の責任があるからやり続けているというのものもあるんですけど。やはり一番大きいのは、さっき母親が言ったような、映画ってどうしても作者の手を本来離れてどこまでも飛んでいくものですけど、そうじゃなくてしっかりトークで、なるべく自分ができる可能の範囲で誠実にちゃんと届け切るといふ、そういう思いもあってトークを続けているというのがありますね。

土屋：

ずっといろいろこちらでお話ししてしまいますが、今回いろいろと参加くださった方の中からも、質問でありますとか感想でありますとか、いろいろと声を聞かせていただけるとよいのかなと思っています。

いかがでしょうか、挙手をしていただきましたら、マイクを持って回ります。

A：

ありがとうございました。

ちょっと私は話が逸れないように気をつけなきゃいけないんですけど、私は特別支援学校の教員を20年ぐらいしていました。教育相談の0歳1歳から20歳ぐらいまでさまざまな子どもたちを見てきて、やはり家族が小さいときは障害を受け入れるまでの母親の日数がそれぞれによって違うということと、あとすごくかなしみというのが、私がまだまだちょっと体の中に入れない部分もあるんですけど。教員だから学校にいる時間しか見ていないんですけど、やはりそういう、特に母親が非常にすごくいろいろ背負っているというのを感じました。きょうだいの方も時々付いて来たんですけど、どんなふうになっているかまでは、ちょっと私はお母さんのほうをよく見ていたので分からなかったんですけど、今日は弟のかなしみということで目の当たりにさせていただいて、今ちょっと感無量っていいですか、何かすごくいろいろと感じました。

私は論文を書く機会がありましたけど、やはり障害を持つ家族ときょうだいについて一度は書こうかなと思ったことがあったんですけども、ちょっとまだそこまでいかないんですけども、本当に今日はありがとうございました。

高木：

ありがとうございます。

土屋：

ありがとうございます。いかがでしょうか。

B：

すみません、今日はありがとうございました。

私はダウン症の子どものいる母親なんですけど、7歳と9歳離れた上に姉と兄がいるんですけど、やはり親としては上手にというかうまく受け入れてほしいので、すごくきょうだいたちにも「この子は大切な子だよ」というふうにならずと育ててきたんですけど。ただ私は本当に、今のその子の姉と兄になるんですけど、本当はどういうふうになっていたんだろうというのが聞けていないんですね、本当に本音が。ただ本当に、やはり自分たちが見なきゃいけないんじゃない

ないかというのはきつとどちらかも思っていたと思うし、親もそうなんですけど、上の子たちが結婚できないんじゃないかなという心配も親もあったし。でもやはり結婚してみても家族ができて、平穩無事にみんな暮らしているんですけど、やはり高木先生みたいにきょうだい障害を持っている自分の気持ちをこんなに赤裸々に突き止めて付き合うというのは、なかなか普通の生活をしている中で子どもたちができなかったんじゃないかなと思うと、今日は本当にこの映画を見させていただいて、やはり自分の子どももいろいろなところに遭遇して、それこそ「シンショウ」と言われる言葉にすごく敏感だった時期なんですね。「シンショウって言葉がすごい嫌いなんだ」と2人がよく言っていたのを思い出して、いろいろな意味で私たち親の知らないところで、やはりきょうだいも傷付きながらいろいろ考えながら生きてきたと思うし、このように本当に突き詰めていけるというか、自分の気持ちをきょうだいに話せていく、きょうだいの気持ちを知ることを本当にするということはとてもすごいことだなと思ったし、母親としてもすごく勉強させていただきました。ありがとうございました。

高木：

ありがとうございます。そうですね、ちょっと2つほど頭の中で紐づいたのでお話をします。

この映画にすごくファンになってくださった京都の方がいるんですけど、その方はご自身の体に障害があって、お兄ちゃんがいたらしいんですね。その人は自分は弟の側なんだという言い方をするんですけど、すごく仲が良かったらしいんですけど、ちょうど20歳前後、すごく早くお兄さんを亡くされてしまったらしくて。事故だったらしいんですけど、本当に「行ってらっしゃい」と言って送り出したら帰ってこなかったという。そこからもう20年以上が経って、その方は4代になっているんですけど。さっきおっしゃってくださっていたように、もうやはり亡くなってしまったら話ができないんですね。その方曰く「この映画見るとすごく毎回、自分の兄貴は本当のところどう思ってたんかすごい毎回毎回気になるんや」と言うんですね。だから仲は良かったけど、本当は僕がいることでいろいろないじめとかいろいろな嫌な思いをしたんじゃないだろうとか、そもそもこの先どう生きていくのかとかどう思ってたんだらうとか。だからこの映画を見ていると、また僕自身と話していると自分の兄貴と話しているような気分になるんだというふうなことをおっしゃってくれています。その方以外にも、この映画を見た後にすごく素朴に兄と弟というか、きょうだいの映画として結構見てくださる方もいて。取材を受けたときに、MCの方がもう60代ぐらいの男性の方だったんですけど、その方にもお兄さんがいて、結構最近亡くなってしまって、「兄貴といろんなしたかった話、いろんなこんな話もあんな話もしたかったのになというのを思い出した」ということを言ってくださったりしていましたね。そういう意味でも本当に対話の映画なんだなと思いますね。

もう1つ、なかなか向き合うのがしんどいという話ですが、実際はそうなんですよ、こんなしんどいことを普通は絶対にしなくてもいいんですよ。というか家族なんで、皆さん向き合って生きていないですね。なあなあだから生きていけている部分もむしろ多いと思うんですね。ただなんか、結局今回だとさっきも話が出ましたが、僕自身がたまたま池谷さんのいる元町プロダクションというところに入り、たまたま映画が作れる環境と人と出会って、たまたまそのときに弟が高校を卒業する、僕自身は大学院に入ってそろそろ将来どうしようかなと考えているという、いろいろな意味で向き合いやすい環境、映画をつくりやすい環境がそろったからこそ向き合えていますし。なので、そこに関してはもう結婚とか就職とか何かタイミングを掴んで、「うちのオトンほんまにもうしょうもないけど、今の機会逃したらもう10年話せへん気がする。だから今まで話したことないし、伝わるかどうか分からへんけどちょっとしゃべってみようか」とかというところまで何かなってもらえたら、すごく映画をつくった側としてはうれしいなと思いますね。

という絡みでおやじの話をちょっとしておきますけれども、おやじはああいう人なんです。僕はいつも話すんですけど、本当に超強面の人で。リングがあるじゃないですか。あれをプロレスラーがよくぐちゅぐちゅにするというパフォーマンスがありますよね。あれはおやじ言わく嘘らしいです。「どういうこと？」といつも聞くんですけど、あれはよく熟してかつ柔らかいアメリカのどこのこのリングを使っているんだみたいな（ことを言う）。「へえっ、じゃあほんまに握力強い人が握ったらどうなの」って、「見とけよ」と言って、ふんってやったら、全然ぐちゃぐちゃにならずに、ふんってやった断面がきれいに線が通って真っ二つになる。こう握ったままふんってやったら、リングが真っ二つに割れて、ほいって。だからおやじは握力が90あるんですけど、そういうすごく強面なおやじなんです。あれで声もでかいし顔もいかついで、やはり息子としてはなかなか言い出しにくい話がいっぱいあって、母親も僕も怖い父親のいつも先を先を読んで、父親が家に帰ってきたらもう完全に安心できる環境にできるようにいつも頭を働かせて言葉をしゃべるみたいな、そういう感じだったんですね。なんですけど、そういうおやじなので、ある種日常会話の中でしっかり会話ができないんですね、喧嘩になるので。だから今回の映画の中ではあれは全然隠し撮りとかじゃなくて、しっかり小道具としてウイスキーまで置いておやじを呼び出しているんですね、男と男の会話というので。ただあそこで何を話すのかというのはもう弟の話ぐらいしか言っていなかったんですけど、やはり緊張感でおやじにはたぶん何かが伝わっていたと思うんですね、恐らく何かこいつしかけてくるなみたいな。おやじはあそこで「いや俺写りとない」とか出ない選択肢もあったと思うんですけど、でもあそこにおやじは来てくれたんですね。来てくれたということ自体が本当にもう、それだけで百点というか、とにかくおやじは逃げなかったんだなという。しかもカメラの前で

しゃべるわけなので。ただ、あそこで何を話していたかという、これは完全にもうフリートーク的な、裏話的な話ですけど、例えば「作業所の見学見に行ったん」って言って、「行ったおれは」と、「何回？」と言うと「1回」と言うシーンがありますけど、あれももうちょっと奥があって。母親にあの話を後日談で聞いたら、あのとき母親が運転でおやじが隣に乗ってご飯を食べに行っていたらしいんですね。その帰りに日常的な会話で、「なんかこの前そういえばその作業所見にいったんよ」という話をして、「ちょっと見てみる？」って、「うん」って言って、母親の運転でそのまま作業所のところまで行って「あれ」って言って、父親はこちらから「ふーん」とのぞいただけで。それをあの人「1回」と言っているんですよ、実質0回。というそんな話を3時間半ぐらいしていたんですね。ある種意識的にそのへんの話は必要ないので入れていないんですけど、とにかく対話の場に出てきてくれて。対話は僕と弟が一番最後に刹那的なんですけど分かり合ったように見えるシーンとはある種対照的に、おやじとはずっと話は平行線のまま、何も分かり合えないままそのままですけど。でもとにかく対話をしようとしてくれる姿勢があるんだったら、とりあえず家族はやってはいけるのかなみたいな。なのでこの映画がみんなが対話をすればみんなが分かり合ってハッピーみたいな、そんなお花畑っぽい映画にはならず、しっかり対話の難しさとか、分かり合えなくてもいいんだというところをちょっとでも表現できたのはおやじのおかげなのかなというのも思います。

土屋：

ありがとうございます。いかがでしょうか。

お二方程手を挙げていらっしゃるので順番に。

C：

ちょっとシンプルに質問があるんですけど、壮真君はこの映画を見たことがありましたか。

高木：

ああ、ありがとうございます。壮真も観ました。観たんですけど、なんかたんとんと観ていましたね。自分が写っている写真とかアルバムとかを見るのが好きで、映画の中でも一緒に見ているんですけど、映画を僕もどんな反応をするんだろうと思って母親と一緒に、コロナ禍だったので会えてはいないんですけど、母親と一緒に見てもらって。母親にどうだったかと聞いたら、なんかたんとんと観てたって。だから僕のあくまでの想像ですけど、弟にとっては本当にあれは日常なので、いつもの家の中を映してくれているんだなど。どうせ映すなら運動会とか何かの、僕がもっと頑張っているところを映してくれればよかったのにぐらいで思っているのかなと。想像ですけど、そんな反応でした。

C：

その中でスポーツはやっていないですか。

高木：

ああ、スポーツはやっていないですね。やっていないですけど投げることがすごく好きで。小さいときから河川敷とか行ったら2時間ぐらい投げ続けていたりとか。家の中でもやはりよく窓ガラスを勝手に開けて外に投げちゃって。高3のときとか、僕の受験案内とか全部それで川に流されていったんですけど。投げるのは好きです、運動は好きです。

C：

ありがとうございました。

土屋：

もうお一方、挙げていらっしゃる方お願いします。

D：

ありがとうございました。

先ほども出ました、お父さんと対話するシーンがもう一番ぐつときてしまったんですけど、あそこで感情をむき出しにされてぶつと切れているところなんですけれど、本当にそれまでは本音で話したりしたことはなかったんですか。それとお父さんはびっくりしてしまったのか、あの後のお父さんはどんな感じだったのかが聞きたいです。

高木：

はい、ありがとうございます。父親の話、そうですね。本当に同世代の人に見てもらって結局おやじとのシーンが一番ぐつときたと言われることがちなみに多いです。若い人ほどそういうご意見をいただきます。さっき言ったようにおやじはああいう人なので、ああいうまじめな話をするときには、お互いもう戦闘開始という感じで話さないと話ができないんですね。なので、人生で本当に3回か4回、数えるぐらいしかなくて。初めてキレたのが僕が中2のときだったんですね。学校に行っていなくて行き始めたすぐとかで。僕がキレたきっかけは家の墓石の話という、全然何かもうややこしいので話さないんですけど、全然関係ない話でキレたんですけど、とにかくぶち切れて。そのときにおやじの本当に目を見て、ガン飛ばして2時間にらみ続けたんですね、泣いていたんですけど。そしたら今度はおやじがびびっちゃって、あいつは人殺しの目をとると。父親の実家に帰ってしばらく帰ってこなかったんです。そういうところはナイーブなんですね。その後も、高校生のときにも1回あって、大学3年ぐらいのときにも1回あったんですけど、段々と僕も学習していくので、何て話したらいいのかとか。怒りながらも冷静に話せるようになるんですけど、毎回なんかおやじはやはり傷ついたり、びっくりしたりしているらしくて。

大学のときに1回そうやってちゃんと話したときにも一晩ぐらい帰ってこなくて。そのちょっと後にたまたまおやじとドライブになって、「いやおまえ、この前いろいろ話して、あの後なんかすごい俺は父親失格やとかいろいろ思ってた、高松の港に行って1日夜を過ごしてたんや。そのままアクセルぶいーんと

踏み込んで高松港の中に突っ込もうかどうか考えてたんや」なんていう話をされて。僕もそのときは「ふーん」と聞いていたんですけど、後から段々と腹が立ってきて。なんで腹が立ってきたかという、おやじはこんなふうに息子にこの話をして何を求めているんだらうか、救いを求めているんだらうか、慰めを求めているんだらうかというので段々また腹が立ってきたというのが4回目なんです。

なので前半の90分は本当にあの勢いでばちばちに話しているんですけど、もう後半の2時間はもう僕は昔のいい話しかしていないんですね。「いや、おやじさあ、いろいろあったけどさ、なんか小学校のときさ、高松の山の中に（クワガタ捕りに）行ったよね。あれ楽しかったよね」みたいな話しとかを2時間ぐらいしているんです。そしたらおやじも結局気のいい人間なので、そうやな、あのころ何とか何とかと言ってだんだんご機嫌になってきたので、ご機嫌になってきたところで撮影を終えて部屋に帰したんですけど。そこでだから僕がどういう思いだったかという、前半の90分は本当に出演者として、そして息子として話しているんですね。なのでもう全開で怒りをぶつけているんですけど、後の2時間は監督の目線で接しているんですね。だから出演者に対して、「本当にありがとうございました」って、「本当に出たくなかったと思うんですけどありがとうございます、息子さんとこんないい話がありましたよね」という感じで内心しゃべっているんですよ。

でもそれも一人の人間として僕自身さっき話したように、土俵に出てきてくれたことだけでやはりすごいなと思っていたので。なので、あの後はおやじとは別にすごく仲が良くなったわけではないんですけどけっして悪くはないですね。

そういう思いも込めて、一番最後の卒業式のシーンで、父親と母親が僕と弟を撮っているシーンがありますけど、あそこをよく見ると父親はすごくいい顔で笑っているんですよ。なので、これでもうおやじとは喧嘩となっておやじに勘当されましたみたいな、そんな悲しい話ではないですよという思いも込めて、一番最後におやじも入れています。

D :

ありがとうございます。安心しました。

土屋 :

ありがとうございました。

まだまだいろいろ話したいことがあるかもしれませんが、そろそろお時間がきていますので、これで終わりにしたいと思います。

先ほど「来てくれたんだ」という、お父さまに関しての言葉がありましたけれども、私たちもこういう場に高木さんが来てくれたんだということを本当にありがたく思いますし、久しぶりの対面の講演会がこういう会でよかったなとしみじみと思っているところです。本当に本日はどうもありがとうございます

た。

高木：

改めてありがとうございました。

土屋：

ではこれで終了にしていきたいと思います。アンケートなどが手元にあるかと思いますが、ご協力くださる方はそのようお願いいたします。

では、ありがとうございました。

(反訳終了)